

まあちゃんの思い出

石本浩市

まあちゃんの病気はファンコニー貧血という先天性の再生不良性貧血で現代の医学をもってしても治療が難しい病気でした。私はまあちゃんが1歳の時からの主治医で7年間のおつきあいでした。小さい頃は貧血も軽く薬の投与だけで大丈夫でしたが、彼女が小学校に入学した頃より、病気が進行し徐々に輸血に頼らざるを得なくなりました。おうちから病院が遠かったのでまあちゃんもお母さんも通院が大変だったと思いますが、二人とも明るく前向きによく頑張ってくれました。

まあちゃんは明るい性格でとても活発な女の子でした。はためには大変な病気と闘っているとは見えなかったと思います。診察が終わって、私がカルテを書いているとよく、ぽんぽんと背中をたたかれました。振り向くと茶めっ気たっぷりに、まあちゃんがにこっと笑っています。多分早く病気を治してよと言いたかったのでしょう。この病気には骨髄移植という根治療法がありますが、まあちゃんの場合は色々な条件が揃わず残念ながらその適応にはなりませんでした。

私は病気の性質や彼女の性格を考慮して、お母さんとも相談

の上できるだけ普通の子供と同じような生活をさせてあげたいと考えました。そうすることは主治医にしてみれば色々心配なこともありましたが、今振りかえれば皆と一緒に学校生活も送れたし、本当に良かったと思います。特に彼女が残した絵を見たとき私たちの判断は正しかったと確信することができました。

お母さんから送られてきたまあちゃんの絵を初めて見たときの感動は言葉に表わせないものがありました。ただ、涙があふれて止まりませんでした。手が不自由で特に親指が使えなかったのにどうやってこんな絵を描くことができたのでしょうか。お母さんにお聞きしたところ人さし指と中指に絵筆をはさんで描いていたとのことでした。多くの絵が病気が進行した最後のつらい2年の間に描かれたことも驚きでした。私はこの絵を一人でも多くの方に見てもらいたいと思い、同僚の医師はもとより看護婦さんや検査技師さんや事務の方々に紹介しました。その反響は予想以上に大きく、あっという間に200セットの絵葉書がなくなってしまいました。

夏の夜空に大きく開いた花火、家族みんなで楽しく食べた年越しそば、力強く大地を駆けるスーホの馬、見ていると心が暖かくなるようなてぶくろの絵、そして何とも言えぬ雰囲気をもし出すむくどりの夢。大きくなったら芸術家になりたいと夢見ていたまあちゃん、あなたはもう既に人々を楽しませ、人々の心を和ませる力を備えた芸術家だったのですよ。ありがとう、まあちゃん。

(順天堂大学小児科)

*まあちゃんの夢基金事務局が画集出版の資金づくりのためにまあちゃんの作品の絵葉書セットを作り、買っていたいたたものです。(編集部)

